

第4講：「元の理」と布教伝道

2025 年度公開教学講座『「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて』の第4回目として、7月25日に『「元の理」と布教伝道』を担当し、「元の理」からみた天理教の布教伝道について報告した。これまで「元の理」の教えに関しては数多くの研究があり、教義書や解説書が多数出版されている。また、「元の理」の取り次ぎによる不思議な守護に関する信仰体験談なども語られてきている。本報告では、そのような先行研究や体験談のなかで、「元の理」と布教伝道とのかかわりについて注目し、現代社会での布教伝道において「元の理」を伝えていく意義や日々の信仰実践における「元の理」のもつ意味合いを考えてみた。なお今回の報告では、「元の理」という言葉を、特に『天理教教典』第3章「元の理」の前半部分にあたる「元初まりの話」を意味するもの、と捉えて話を進めた。

天理教は、その教えと信仰を広く世の中へ伝える活動を積極的に行っている。親神は「世界いちれつをたすける」という世界中の人々の救済、そして「人間が陽気ぐらしをするのを見てともに楽しみたい」という陽気ぐらし世界の実現のためにこの世に顕れた。それは「元初まりの話」に基づくものであった。この世界の人々の救済と陽気ぐらし世界実現には、親神の存在とその教えを人びとに伝え共有する必要がある。つまり、天理教は立教のときから「布教伝道」という使命をもっていたのであり、それは「元の理」（元初まりの話）に明らかであると言える。

では、布教伝道において「元の理」はいかなる意味を持つのであろうか。おやさの「こふきを作れ」との言葉に呼応して、明治14年ごろから数々の「こふき話写本」が執筆された。おやさはいずれに対しても「これでよし」とは言われなかったとされるが、これらの筆写本に共通して見られるのが「元初まりの話」であった。このことから、人間世界創造の話はおやさが最も重点をおいて話した教理であり、「元初まりの話」はおやさが最も伝えたかったことのひとつであると考えられる。つまり「元初まりの話」は布教伝道の際に伝えるべき教えであり、これを伝えひろめることが布教伝道の要点と言える。人間存在の根源的真理の教示である「元の理」は、普遍的な思想的・論理的側面をもつ「ひろめの理話」であり、布教伝道において伝えていくべき根本的な教理である。また、「元の理」はしばしば「たすけの理話」と称される。「元の理」は、おやさが教えられたかぐらづとめによるよろづたすけの意義を示している。「元の理」は単なる人間世界創造の説話ではなく、人間救済の説話でもある。布教師が「元の理」を説くことで、人々の心の入れ替えを促し、不思議な御守護が現われたという事例が数多く伝えられている。創造の教理を味わうことがそのまま救済の手引きとなり、親神の望まれる陽気ぐらし世界へと導かれていくのである。

「元の理」がどのように広められてきたかについて、井上昭夫は明治14年ごろから教祖百年祭までの歴史を分類している（『中山みき「元の理」を読み解く』日本地域社会研究所、2007年、28～52頁）。これによれば、人間がさまざまな苦難を乗り越え成長していくように、「元の理」が社会各界からの攻撃や国家権力からの弾圧を受けながらも、段階を経て徐々に広められ

ていった様子がわかる。そして、幾多の障害を乗り越えてきた現代においては、「元の理」を説くことに何の支障はなく、多くの人へ自由に伝えることができる。その一方で、学術的・論理的思考をもつ人々へ「元の理」をいかに伝えていくかは今なお大きな課題となっている。「元の理」をひろめていくためには、まず「根を掘る」こと、つまり「元の理」への理解を深めることが不可欠である。これまでに「元の理」への理解を深めひろめていくために、勉強会、シンポジウムなどさまざまな機会が設けられ、その伝え方が検討されてきた。さらに、造形、絵画、版画、音楽、演劇、舞踊などの芸術を通じて「元の理」は表現されてきた。これらに関わった人々の多くがその過程において「元の理」への理解が深められたと述べ、その作品を享受した人々は「元の理」の存在を知る契機となっている。このように、「元の理」のひろめにも多様な方法と形態があり、伝える側と受け止める側の双方に小さくない影響が及ぼされている。

「元の理」は布教伝道においてのみ重要な教えではない。3代真柱はかつて、「お道の人らしく」日々の生活を送るには、「元初まりの話」を心に治め、その教えを日々の生活で実践していくことが肝要なのである、と述べた。つまり、布教伝道に従事するか否かに関わらず、信仰生活を送るうえで「元初まりの話」は大切な教えなのである。「元の理」を日々拝読し、慣れ親しむことが不可欠であり、さらに、その現代的理解が求められる。「元の理」は現代社会で湧き起こるさまざまな問題を思案する手掛かりになるものであり、自分自身で思案して当てはめて考えていくことが大切である。

現代社会はあらゆる面で多様化が進んでいる。「元の理」と布教伝道を考えるうえで、異なる文化圏で生活する人々が「元の理」の教えをどのように受け止めるかについて知ることは有意義であろう。別席取次者の経験談や外国人天理教信者のコメントなどを見ると、「元の理」の受け止め方には、その人がもつ社会的・文化的背景が影響すると考えられる。また欧米人が天理教について書いたものからは、日本とは文化や習慣が大きく異なる環境で育ち、しかも日本語を解さない人々が、「元の理」やその他の天理教の教えをいかに理解しているのかを知ることができる。こうした、異なる文化圏で生活する人々が「元の理」をどのように受け止めるのか、また彼らがそれをどのように表現するのかという視点は、「元の理」をいかに伝えていくのかを考慮する上で大いに役立つ。

今回の報告では、「元の理」が布教伝道と密接な関係を持ち、創造と救済の説話として布教伝道において伝えるべき内容の要であることを確認した。また、「ひろめの理ばなし」である「元の理」への理解を深めることは重要であり、さらに日々の信仰生活においても「元の理」への意識をもつことが大切であると論じた。今後の課題としては、布教現場における「元の理」教説取り次ぎの事例に関する一層の調査・研究、およびさらなる方法論構築、そして天理教信仰者として「元の理」を日々の信仰生活に取り込む方法と実践の模索などがあげられる。さらに、教外者が「元の理」をいかに受け止め、理解するのかという点に注目することも重要であろう。